



# 健康の輪



編集●全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局(結核予防会内) 題字●初代会長 廣瀬勝代

## カンボジアスタディツアーの報告

鹿児島県結核成人病予防婦人会  
会長 伊佐 幸子



2019年12月4日  
宿泊先のひまわり  
ホテルを出発して  
カンボジア結核予  
防会(CATA)を  
表敬訪問しました。

CATA職員の方やCATA婦人会  
の方々のあたたかいお出迎えを受  
けました。複十字シール運動で始  
まったCATAへの支援。日本の結  
核予防会(JATA)からの支援プ  
ロジェクトでは、工場における結  
核検査を実施し、結核にかかった  
人を見つけ、適正に治療し続ける  
ことができるようになりました。  
このプロジェクトを実施する時、  
工場と契約するところから始まり  
ます。痰を回収し、検査すること  
で発見される結核。2019年の終  
わりごろには、痰の回収率が100%  
になる予定だという報告がありま  
した。従業員を通して結核の知識  
や治療の方法などが普及し、そ  
れが家族や住民の理解に繋がっ  
ている。健康な人を増やすことによ  
って、その人材がカンボジアを豊  
かにして、子どもたちや一般の人々

への教育にも行きわ  
たると思いました。

また、今回は女性  
国会議員のラオク・  
ケイン副議長が私た  
ちを国会に招いてく  
ださり、7人の国会  
議員の皆様とお話を  
交わすことができました(写真1)。大  
きな感謝の意を表す

とともに、日本にぜひお招きいた  
だきたいとのことでした。団長と  
して同行した結核研究所対策支援  
部副部長の永田容子氏からは、適  
正に支援のお金が使われている  
か、結核予防会と結核予防婦人会  
がどのようにして募金を集めてい  
るかの苦労話もされました。

カンボジアは国民の平均年齢が  
25.6歳という若い国です(2016年  
データ)。複十字シール運動をみ  
んなで頑張って、この国の未来を  
育ててあげましょう。🐱



※ラオク・ケイン  
副議長は、平成29  
年8月の「婦人の  
国際会議」で日本  
に来られました。



写真1 国会議員表敬訪問時の記念撮影

山口県結核予防婦人会  
副会長 岡部 つや子



令和元年12月3  
日～6日にカンボ  
ジアスタディツ  
アーに参加させ  
ていただきました。

初日は、CATA  
事務所を表敬訪問し、CATA婦人  
会との交流をしました。

翌日はピアレン医療圏の州病院  
を訪問しました。結核予防婦人会  
からの自転車の寄贈へのお礼と結  
核対策の現状をお話していただき  
ました。また、レントゲン、パソ  
コン、バッテリーなど、日の丸と  
結核予防婦人会のシールが張られ  
た医療機器が活躍していました

(写真2)。

農村地区の人々はほとんど結核検査が受けられないのが現状です。そんな中、医療ボランティアが家庭訪問で痰の採取をします。しかし、農繁期には家庭訪問がなかなかできず、検査もままならないようです。痰の採取で検査をするなど、私が思っていた結核検診の方法とはまるで違い、医療の遅れをひしひしと感じました。しかし、痰に異常があればすぐにレントゲン検査をし、治療を受けることができるようになります。そのため結核で亡くなる人数も少なくなっています(写真3)。

院内のレントゲンで撮影するとすぐパソコンに取り入れ、それが日本に転送され、日本の医師の指示で治療が行われます。ここの視察は、とても興味深いものでした。複十字シール運動募金がカンボジアの人々の笑顔と健康に役立っていることを実感できました。

今回とてもよい経験をさせていただきました。ここで見て感じたことを多くの人に伝え、募金運動への取組を今まで以上に行って行

きたいと思います。今回のスタディツアーに参加させていただいたことに感謝申し上げます。🍷

**焼津結核予防会**  
(静岡県結核予防婦人会焼津支部)  
副会長 八木 恵子



12月3日、私たち一団7名(引率で結核予防会経理課職員も同行)は、成田空港からカンボジアプノンペンへと出発しました。予定通り快晴の現地に着き、結核予防会国際部副部長の柳亮一郎氏、現地通訳のピセットさんの温かい出迎えを頂き、スタディツアーは始まりました。

1日目は、工場視察予定が変更になり、国会議事堂に表敬訪問。ラオケン議員と永田団長の対談となりました。次にCATAの事務所に表敬訪問。2つのプロジェクト活動の説明を受け、婦人会の方々とも交流を深めました。

2日目は、プノンペンから60km離れたピアレンODへ視察に行きました。現地の抱えるさまざまな

課題などを聞き、また日本側は、婦人たちが家を一軒一軒訪ね、募金活動をして、カンボジアに寄付していることなども伝えました。

最終日となる3日目は、プノンペンにある国立保健科学大学へ表敬訪問。大勢の学生たちが自由なスタイルで館内外を元気に闊歩する姿に、カンボジアの将来への期待が感じられました(写真4)。健診検査センターでは、JATAの4つの基本方針、国際協力ミッション、これまでの支援の成果等の説明を受けました。また、遠隔接続によるX線画像の2次読影、日本の新しい結核検査機器を使用し、診断の迅速化および早期発見、質の高い技術、治療の向上に努められているとのことでした。日本人看護師常駐のもと、日本式の人間ドックも行われています(写真5)。

今回のツアーで、それぞれの立場での御努力を、身を持って感じることができ、今後、私たち婦人会の一人一人が、この活動の大切さを多くの人に伝え、益々の活動に力を注ぎたいと思いました。🍷



写真2 最新の医療機器に囲まれた執務室



写真4 国立保健科学大学でのミーティング



写真3 採痰結果を見せてもらいました



写真5 日本と同じ人間ドックが受診可能な健診センターの様子

## 令和元年度地区別結核予防婦人団体幹部研修会（4地区） 開催地よりご報告

### 北海道地区

北海道健康をまもる地域団体連合会  
会長 齋藤 芳子



令和元年7月4日（木）5日（金）、北海道の中心に位置する美瑛町、国立大雪青少年交流

の家に於いて、第52回北海道家族の健康をまもる講習会が開催されました。道内各地から婦人団体が参加、北海道結核予防会、北海道対がん協会のご協力を頂き総勢83名が参加しました。

1日目、オリエンテーション、野外スポーツで体力づくりを実施、夕食後「あなたのまちの健康づくり」をテーマに5団体の活動報告を実施、情報交換、交流討議を行いました。

2日目、結核予防会国際部主任後藤眞喜子氏による「結核予防会による国際協力」—ザンビアのコミュニティ活動—、国際協力の歴史、なぜ国際協力か、世界の結核とザンビアでの活動、ボランティア活動の必要性、複十字シール募金による活動等々、実践に基づく貴重な講演を拝聴致しました。

その後、札幌がん検診センター長、河原崎 暢先生の「がんを知ろう」をテーマに、1. 日本のがんの実態と予防、2. がん検診率

の低い本質と歴史、3. がんから見てくる人類の歴史の講話から、がん検診受診率向上に対する啓発活動強化、がんの知識をより深め、今後に生かす貴重な研修となりました。🐱



### 関東甲信越地区

千葉県連合婦人会  
会長 渡邊 年子



令和元年12月3日（火）会場、東京ベイ舞浜ホテルファーストリゾートにて、関東甲信越地区

結核婦人団体幹部講習会が開催されました。目的は、結核予防に関する知識の向上と各県婦人団体相

互の情報交換を図り、結核のない明るい住みよい社会づくりに寄与しようとするものです。

参加者は、1都9県婦人幹部団体150名県外40名県内約100名の参加でした。ちば県民保健予防財団理事長藤澤武彦先生の挨拶に始まり、講演（Ⅰ）「肺の生活習慣病と呼吸リハビリテーション」複十字病院呼吸ケアリハビリセンター付部長千住秀明先生を講師に、COPDは早期発見、早期治療、リハビリテーションで可能な限り疾患の進行を予防する運動能力が改善されるお話しでした。講演

（Ⅱ）「複十字シール運動でつながる世界の輪 ～これからの婦人会活動～」全国結核予防婦人団体連絡協議会理事・事務局長山下武子氏より、世界の結核が減らないと、日本の結核は減らない、結核予防は婦人の手で、正しい知識を学ぶ環境づくりと行政と市民の架け橋の啓発を行って下さいと話されました。講演（Ⅲ）「ワクチンで子どもを守ろうBCG接種」結核研究所名誉所長森亨先生の講演でBCGは、毒性を弱めた牛の結核菌で作ったワクチンで、結核の免疫をつけるために、1歳までに接種、子どもの結核は感染すると発病しやすいとお話ししました。

私達が日常生活の中で結核について正しく理解し、啓発運動への知識を高めて、活動へ取り組んでまいります。講師の皆さまありがとうございました。🐱

### 中国・四国地区

広島県地域女性団体連絡協議会  
会長 佐藤 浩子



令和2年1月16日(木)~17日(金)、中国・四国各県から350名の参加者が広島県民文化

センターに集い、結核予防に関する知識の向上と地域における健康づくり活動の推進を図ることを目的に第19回の幹部研修会を開催しました。

初日は、プロローグで令和初めての新年にふさわしく箏曲の演奏をお聞きいただきました。広島県は箏の生産日本一です。開会行事の後、結核研究所の森亨名誉所長より「ワクチンで子どもを守ろうーBCG接種ー」と題しBCG接種の効果と大切さをご講演いただきました。引き続き結核予防会の小林典子事業部長から「結核予防婦人団体と複十字シール運動」と題しご講演いただき、続いて複十字病院呼吸ケアリハビリセンター付の千住秀明部長より「肺の生活習慣病-COPDと呼吸リハビリテーション」と題しご講演がありました。その後、広島東洋カープの元投手で現在は実業家として活躍されている渡辺弘基様に「生き生き人生!」と題しポジティブ思考で生きる大切さをお話いただきました。

2日目はエソール広島研修室において広島県医師会桑原正雄副会長による講演「感染症について」

では最近中国武漢で発生した新型コロナウイルスについてもお話いただき、続いて国立病院機構東広島医療センター元感染症診療部長の重藤えり子先生から「広島県の結核の現状」をご講演いただきました。2日間にわたり充実した研修会となりました。🐱



### 九州地区

鹿児島県結核成人病予防婦人会  
会長 伊佐 幸子



令和元年11月13日と14日、鹿児島市町村自治会館に約200名(県外30名・県内170名)の関

係者が集いました。講習会第一日目、「肺結核診療の現状」。

講師は南九州病院呼吸器科濱田美奈子先生。病院では外国出生の患者が目立つ。結核終息のために各機関の包括的な対策が必要とのこと。講演②は結核研究所名誉所

長森亨先生「ワクチンで子どもを守ろう。BCG接種」。講演③は全国結核予防婦人団体事務局長山下武子氏の「複十字シール運動でつながる世界の輪」。結核予防婦人団体が全国組織になって今年で42年目。複十字シール募金は国内だけでなく、途上国での結核の減少も支援。

二日目は地域における活動をテーマにシンポジウムを開催。宮崎県山口和代幹事・沖縄県本永会長・鹿児島県の赤星副会長の発表、座長保健センター桶谷会長、山下事務局長と伊佐鹿児島県会長が助言。

二日間の中身の濃い研修と会員同志のふれあいでこれから以後の運営の盛り上がりが多いに期待できました。🐱



## 世界保健機関西太平洋事務局長葛西健先生 顧問就任

このたび、顧問就任をうけて、葛西先生からメッセージをいただきましたので、ご紹介します。



この度、結核予防婦人会顧問をさせていただくことになりましたWHO西太平洋地域事務局長の葛西健です。

結核対策は、私にとっての試金石です。WHOで初めて任された仕事が結核でした。丁度DOTSを全世界に展開する時期で、担当となったフィリピンで必死に地方行脚したのを覚えています。それから20年この地域では2300万人以上の方々が治療を受け、1400万人の命が救われてきました。しかし、いまなお毎日5000人が結核に罹患し、250人が命を落としています。まだまだやるべきことがあります。

結核は、しぶとい感染症です。私も結核とはしぶとく付き合う覚悟です。日本は、結核対策の推進を通して、ユニバーサルヘルスカバレッジ（UHC）を確立してきた歴史があり、世界が注目しています。その基盤となったのは地域に根ざし家庭や地域における連帯・連携を通じて結核対策を支援した婦人会の活動です。活動をさらに盛り上げ、ご一緒に日本の経験を世界に発信できれば嬉しく思います。

令和元年10月17日（木）、本協議会理事・事務局長を訪ねて、世界保健機関西太平洋事務局（WPRO）の葛西健先生が、来会されました。かねてより、婦人会の顧問への就任をお願いしておりましたが、承諾書をいただきました。

婦人会活動に叱咤激励してくださることでしょう。

また、結核予防会理事長、専務理事、国際部長、結核研究所所長も同席し、葛西先生との意見交換を行いました。

今後のアジア太平洋地域での施策の方向性について2019年9月に公表されたことなどを教えていただきました。

結核に限らず、さまざまな対策の手がすみずみまで行き届くよう、「Reaching the unreached（届かないところへ届ける）」というスローガンや、カンボジアでの健診センター事業の進め方など、いろいろなアドバイスもいただきました。

最後に記念撮影を行いました。



前列右から、工藤理事長、葛西先生、山下理事・事務局長、  
後列右から埼玉医科大学教授亀井先生、羽入専務理事、岡田国際部長、加藤結核研究所所長

## 会長就任ご挨拶

栃木県地域婦人連絡協議会  
会長 柳田 京子



昨年令和元年5月20日に行われた定期総会において、前櫛淵澄江会長よりバトンタッチいたしました。

会長就任後、早速7月に知事表

敬訪問があり、9月末には結核予防キャンペーンとして結核予防の広報と複十字シール募金運動のイベントに参加いたしました。12月には千葉で行われた結核予防婦人団体関東ブロック幹部研修会に参加をさせていただきました。

このようなイベント、研修会を通して日本は結核中進国、まん延は欧米の数倍、罹患率は米国の5倍弱、であるということを確認し

ました。これは憂うべき事態だと思います。

高齢者は結核罹患後、発症は子どもの1%に比べて15%が数十年後に発症するという結果が出ています。高齢者の生活習慣病の問題（糖尿病、喫煙）も重要な要素になっており、定期的な健康診断の必要性を強く感じ、健康診断の促進に力を注いでいかなければならないと思っております。🐱

## 日本の結核予防婦人団体とベトナム婦人連盟との交流

私たち（山下武子事務局長、紺麻美主任〈本部国際部〉、クック・ティガンさん〈日本で結核治療経験があり外国人相談室ベトナム語通訳〉、撮影クルー〈2名〉）は、2019年11月4日～7日ベトナムハノイ市を訪問しました。

結核研究所加藤誠也所長の国連ハイレベルミーティングにおけるスピーチで日本の保険制度、地域での結核予防婦人会活動による普及啓発などが紹介されたことが契機となり、2019年8月にベトナムNTPマネージャーDr. ニュンから、日本の結核予防婦人会の活動に関する興味と協力要請があったことがきっかけでした。「社会貢献したい、やるしかない、結核を減らしたい（なくしたい）、そのためにもリーダーシップは必要」という強いメッセージが示され、NTP（国家結核対策）スタッフおよびベトナム婦人会広報部長とともに合意が得られました。ベトナム婦人連盟での協議、WHOベトナム事務所大津聡子先生を表敬

訪問、ハノイ肺病院訪問見学、Hai Ba Trung District TB Unit（DTU）訪問、NTPスタッフとの会議および国立肺病院、国立肺病院全体の見学を通し、婦人会活動における「結核の正しい知識」の研修への理解と協力を求めました。

これからは、ベトナム婦人会とNTPとが一緒になりこれから10年

公益財団法人結核予防会結核研究所

対策支援部副部長 永田 容子

間の目標（2030年までに罹患率を20以下にする）を目指して相互に学びあう関係を築きあげる必要があります。ベトナムでまだ取り組めていないのが、婦人団体との共同による普及啓発活動です。全国組織で経験のある日本と交流を深めお互いに発展し、新たな力が生み出されることを願っています。🐱



コッホ博士の像のある国立肺病院前で記念撮影（右端が筆者）

## 複十字シールキャンペーン活動報告

東京都地域婦人団体連盟  
会長 谷茂岡 正子



2019年11月24日(日)に葛飾区保健所(健康プラザかつしか)で「健康食育フェア」(今年のテーマは“見て!聴いて!測って!体験して!”)が開催されました。

全国結核予防婦人団体東京葛飾支部として、結核予防についてのパネル4枚を手作りで作成し、展示しました。そこで複十字シール運動の紹介もさせていただきました。朝10時から開場するのですが、その前から玄関先に来場が並ぶ盛況ぶりでした。開会式典が終わると、健康チェック・血管年齢測定は整理券が配布されるのですが、その行列が展示スペースの前にもでき、朝から声掛けに大忙しでした。

パンフレットをお渡ししながら、「日本はまだ結核患者が多く、

世界の中ではまだまだ中まん延国です。何とか1日でも早く低まん延国になるようご協力ください」とPRしながら、展示ブースを見ていただくようにしました。さらに立ち止まっていた方には、高齢化が進む中、65歳以上が7割を占めていること、働き盛りの患者発見が遅れていること、外国生まれの患者が増加していることなど、「結核の常識2019」を渡しつつ、説明しました。

そして、結核予防会の活動の一つに複十字シール運動として募金活動を行っていますので、結核をなくすために募金に協力をお願いしました。収益金は、結核予防の普及啓発活動、開発途上国への結核対策支援に活用していることなどをパネルで説明しながら、ご理解いただくようにしました。そこで、100円を目安に募金媒体を並べて、一般の参加者のみならず区長さんや議員さんまで、目の前を通る方すべてに呼びかけ、募金をお願いしました。

複十字シール運動は、世界の中の結核を制圧し、肺がんなどの呼吸器疾患をなくすため、世界の約80の国と地域で行われている募金活動です。私たち婦人団体は、機会あるごとに複十字シール運動を実施し、その活動のお手伝いをしています。

昨年12月3日開催された令和元年度関東甲信越地区結核予防婦人団体幹部研修会(千葉県)では、複十字病院の千住秀明先生の講演があり、結核や肺がん、COPDなどで呼吸器に関連した病気を持つ患者の呼吸器ケアリハビリテーションについて学びました。新たな知識を習得して、次のキャンペーンの時の声かけなどに活かしていきたいと考えています。

まだまだ結核患者は多く、結核予防の教育・広報、開発途上国の結核対策事業、調査研究などに役立つよう、機会をみつけては複十字シール運動を展開してまいりたいと思っています。🐱



## 安野光雅先生と複十字シール

結核予防会事業部 部長 小林 典子

結核予防会は17年間にわたって、安野光雅先生に複十字シールの図案を提供いただいておりますが、ひとつの節目を迎えました。

安野先生にシール図案をお願いしたのは、複十字シール発行51年目の2002年、次の50年に向けた新たなスタートの年でした。以後、2018年までの17年間、素晴らしい図案を提供いただきました。

毎年、楽しみに待っていただいている方も多く、「今年のシール、大好きです」「子供のころを思い出します」など、シールに寄せた声が届きます。そんなファンの多い安野先生のシールですが、この度、制作辞退のお申し出がありました。今回、先生への感謝の気持ちを込めて、17年間のシールの中からいくつかを複十字誌5月号に掲載予定です。あわせてご覧いただければ幸いです。

1968年（昭和43年）に「ふしぎな絵」で絵本界にデビューされた先生の作品は知的で獨創性にあふれています。1984年には絵本のノーベル賞とも言われる「国際アンデルセン賞」を受賞されました。その後も数々の賞を受賞され、2001年に故郷・島根県津和野町に「安野光雅美術館」、2017年には京都府京丹後市に「森の中の家 安野光雅館」がオープンしました。芸術のみならず、科学や数学、文学にも造詣が深い先生には、多数の著書があります。2017年に出版された「本が好き」（山川出版社）の中で、複十字シールに触れられています。「わたしは結核予防会というところのシールをかいている。・・・このごろまた結核が猛威をふるっているというから注意したほうがいい」

2018年、最後のシールは、安野先生の絵・監訳による「小さな家のローラ」（朝日出版社）をもとにかいていただきました。2019年2月、結核予防会の創立80周年を記念した第70回結核予防全国大会では、これまで発行した全シールの展示とともに、安野先生の書籍や原画の展示を行いました（写真1）。椅子に座って本を手にとってくださる方もいて、ゆっくりとあたたかい時間が流れる素敵なコーナーとなりました。

複十字シールは「結核を中心とした胸の病気をなくして、健康を願う」メッセージを広く伝えるものであり、明るさ、優しさなどが感じられ、幅広い世代の方に受け入れられる図案が望まれます。2020年は、結核の治療経験があり、結核をなくすための活動にかかわりたいという強い希望をお持ちのイラストレーターあさいとおる氏（写真2）をお願いすることといたしました。

シールに込められた安野先生の結核予防への思いを、あさい氏のシールを通して引き続き皆様にお届けしたいと思います。🐱



写真1 2019年2月全国大会での展示コーナー



写真2 あさい氏と作品

## コラム 個人でできる国際協力

埼玉医科大学社会医学  
教授 亀井美登里



### 早い春を迎えて

今年は春の訪れが早い。冬の平均気温は過去最高を更新し、平年より2度ほど上昇。併せて、降雪量は平年を大きく下回り、夏の水不足につながる恐れがある。その影響で桜の開花も記録的な早さとなるらしい。いつもに比べて暖冬と肌感覚では感じていたものの、数字で見ると感覚以上である。気象庁は「異常気象」と認めている。

### 持続可能な開発目標 (SDGs)

地球環境の変動が危惧されている。2015年9月、ニューヨークの国連本部で行われた国連サミットでSDGs (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標) が採択された。気候変動など地球規模の問題を解決するために「誰ひとり取り残さない」という共通理念のもと、国連加盟193カ国が達成を目指す2016年～2030年までの国際目標である。SDGsでは17の目標と、それを達成するためのより具体的な169のターゲットが設けられた。地球環境に関して、地球で人類が安全に活動できる範囲を科学的に定義し、定量的に提示した「プラネタリー・バウンダリー (地球の限界)」という概念がある。これを見ると、地球は既に生物種の絶滅の速度をはじめいくつかの点で限

界に達している。「自分たちさえよければいい」では、結果的に自らの首を締めることになってしまう。SDGsは私たち人類と地球を守るために達成しなければいけない国際公約。SDGs達成度ランキング2019の上位は、デンマーク、スウェーデン、フィンランド、フランス、オーストリアなど欧州諸国で占められ、わが国は15位である。

### 変化は自分自身から

全世界的な目標であるSDGs達成には、世界中のすべての人々が当事者意識を持つことが大切である。国として取り組むことも重要だが、個人として取り組むべきこともたくさんある。例えば、見えないテレビのスイッチを消すこと、紙やペットボトルのリサイクル、買い物にマイバッグを持参すること、使わないものは寄付する等々。地球に暮らす当事者として現状に危機感を持ち、行動を起こす人は間違いなく増えている。国際連合広報センターの「持続可能な社会のために - ナマケモノにもできるアクション・ガイド」によると、日常生活の中で誰もができるSDGsへの貢献をわかりやすくまとめて紹介している。

SDGs達成度ランキング1位のSDGs先進国デンマーク。そのデンマーク特有の考え方が「ヒュッゲ (Hygge)」。家族や友人たちと

過ごす温かく居心地のよい雰囲気や時間が日常生活に不可欠という価値観だそうだ。家族や友人との時間、自然とのふれあい、見栄を張らず、無駄なものがない生活に居心地の良さを感じ、それを大事にしているという。その価値観そのものがSDGsに繋がり、如いては地球全体を守ることもなろう。地球上で生活する私たちは、地球の傷を癒す助けとなる必要がある。

### 実行あるのみ！

国際協力へのかかわり方は人それぞれだ。国内外のボランティア、ビジネス、寄附活動等色々な手段がある。グローバル化によって、企業や市民社会が国籍を超えた存在となって世界を繋いでいる。世界は相互に依存し、共存している。

奇しくも米国では大統領予備選挙が始まった。そういえば、今から半世紀以上前のケネディ大統領の1960年就任演説の言葉が蘇る。

「あなたの国があなたのために何ができるのかを問うのではなく、あなたがあなたの国のために何ができるのかを問うて欲しい」という国民への呼びかけを。国際協力としてあなたの地球に対して何ができるかを今一度自身に問うてみる必要があるかもしれない。

あのうらかな春を取り戻すためにも。🍷

## ちふれ化粧品は・・・

「誰もが手に入れやすく、安心してつかえる化粧品を。」という思いを込めて創り出した私たちの化粧品です。



### ちふれが、約束すること。

- **高品質・適正価格であること。**  
製造や販売にかかる余分なコストを削減して、高品質を適正な価格でお届けします。
- **無香料・無着色であること。**  
肌によさしくありたい。だから、ちふれのスキンケアはすべて無香料・無着色です。
- **全成分・分量・配合目的を公開すること。**  
品質の確かさや商品の安全性だけでなく、自分の肌に合った化粧品の内容を知っていただくためにも、すべての製品の全成分・分量とその配合目的を公開しています。
- **製造年月をすべての容器に表示すること。**  
誰にもわかりやすく、安心して使えるように、製造記号を製造年月で表示しています。
- **環境問題に配慮すること。**  
毎日使う化粧品だからこそ、環境を大切にしたい。ちふれは、詰替化粧品や植物由来容器の導入などで、環境問題に配慮しています。



## ちふれ

あなたの、健康のそばに。



## しあわせは、明日も健康であること。

人々の健康意識を高めること、日々の生活をOTC医薬品でサポートすること。  
それが「セルフメディケーション」をスローガンに掲げる私たち大正製薬の使命。

OTC医薬品のリーディングカンパニーとして、

より優れた医療用薬品の開発に力を入れるチャレンジャーとして、  
常に「生活者の健康でより豊かな暮らし」の実現を目指しています。